苅田の鎮守様は、草津大歳神社と言って、元は西光寺の隣の、苅田福祉会館のある場所に鎮座していました(現在も、石碑が残っています)。保存樹に指定されている「苅田の大楠」はそのご神木でした。この神社は、明治政府の小神社統合によって、大依羅神社に合併されてしまいましたが、平安時代に作成された「延喜式」にすでに記載されている「式内社」と言う伝統のある神社でした。

「大依羅神社御祭神」

大巳貴命
月讀命
垂仁天皇
五十猛命
底筒之男命
中筒之男命
上筒之男命
建豊波豆羅和気王
大山咋大神　庭井
草津大歳大神　苅田
建速須佐男大神　我孫子
奴能太比賣大神　杉本
奇稲田媛大神　杉本
八柱御子大神　杉本
素盞嗚命　杉本
素盞嗚命　山之内

苅田の鎮守様は、草津大歳神社と言って、元は西光寺の隣の、苅田福祉会館のある場所に鎮座していました(現在も、石碑が残っています)。保存樹に指定されている「苅田の大楠」はそのご神木でした。この神社は、明治政府の小神社統合によって、大依羅神社に合併されてしまいましたが、平安時代に作成された「延喜式」にすでに記載されている「式内社」と言う伝統のある神社でした。

このように、苅田を含む依羅地区は古代から開けた地域でした。

中世になりますと、南北朝の動乱期に、遠里小野で大きな戦がありますし、戦国期にも何度か大きな戦乱の舞台となりました。やはり堺、平野、大坂と言った経済の中心に近いだけに、色々な紛争に巻き込まれたと思われます。また、この地域の大きな勢力として住吉大社が在りますが、所領関係は不明です。ただ、大依羅神社が江戸時代初期に衰退したとき、住吉大社の神官が復興運動をしています。この時代には、やはり「依網池」を中心に花田、杉本、我孫子、庭井、苅田などの集落が荘園ないしは郷村を形成し、五箇荘(五ヶ庄)と呼ばれていました。この名称は「寺田家文書」では江戸初期の万治2年(1659)まで使用されていますし、現在の堺市五箇荘に名前が残っています。

中世の苅田に関する直接的な記録は無いようですが、先年発掘された、「大和川左岸遺跡」では中世の住居跡が出ていますし、「苅田四丁目遺跡」では中世の鋳物師の工房遺跡が出土し、伝説と言われていた「苅田鋳物師」が実在していたことが判明してきました。

この遺跡は、苅田村の環濠の外にあり、「寺田家文書」には全く出てきませんので、農村部とは違う体制に在ったのかも知れません。

豊臣政権下では、天正11年(1583)の今井宗久宛知行目録「摂州欠郡内五ヶ庄　所々知行目録事」に苅田村が現れます。

その後、慶長3年(1598)時点では片桐且元の領地であることが確認されます(「寺田家文書」)。

§近世の苅田

近世に入りますと、寺田家文書(約5000点)が残っていますので、苅田の事が分かってきます。

まず、江戸時代の苅田村の石高は約800石で、その内約700石が高槻藩領で残り100石は天領(幕府直轄領)となっています。

領主としては、片桐且元のあとは、嫡子の出雲守孝利が継いでいます(元和2年(1616)の高改帳)。

その後、少しの間不明ですが(大坂城落城後、大和国の竜田へ移った片桐氏領のままだったかも知れません。)、寛永17年(1640)には高槻藩主の松平若狭守が領主となり、慶安2年(1649)には次の高槻藩主である永井日向守直清に引き継がれ、以後幕末まで高槻藩(永井氏)領でした。

天領の方は、寛永年中は旗本の木村惣右衛門が代官でしたが、その後は様々な人が代官になりました。

江戸時代を通じて、この地域に起こった重大事件は、大和川付け替えによる「依網池」の消失でした。

本来の大和川は、亀の瀬渓谷で奈良盆地から大阪平野に出、石川と合流して北流し、上町台地の北端、現在の大阪城付近で淀川に合流していました。